

---

# ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

ジンダイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

### 【Nコード】

N9388Y

### 【作者名】

ジンダイ

### 【あらすじ】

舞台はカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュの五つの地方からなる世界。

そのひとつ、ホウエン地方の隅にある、ちょっと変わった風習のある小さな村。そこでも他の町と変わらず、今年も新人トレーナーが旅立とうとしていた。しかし、この村特有の最初のポケモンを決める儀式から、少年達は少しずつ、伝説のポケモンの戦いに巻き込まれてゆく。

この話は、人々から忘れられた戦いとそれを止めようとする人と

ポケモンの物語である。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

## ブローグ

ここは上も下もない、時間も空間も安定しないこの世の裏側、反転世界。

そこにいる2匹のポケモン。

体は白と紫で、首の後ろに管のようなものがあり、長い尾をもついでんしポケモンのミュウツーと、赤いトゲのついた黒い影のような翼をもち、ムカデのような姿をしているはんこつポケモンのギラティナだ。

ギラティナ「そろそろ…始まってしまうのか…」

ギラティナがため息を吐きながら言う。

ミュウツー「戦いは、復讐は何もうみださない…憎しみ以外は…それは私が一番よく知っている」

ギラティナ「そうだな…だが皆はそれに気づいていない…ダークライが上手くやってくれればいいが…」

と、そこへ2匹の後ろに黒い影が地面を這ってきた。

???「帰ったぞ」

そして黒い影からポケモンが出てきた。青く鋭い目に、黒い衣のような体をしたポケモン、あんこくポケモンのダークライ。

ミュウツー「…どうだったか」

ダークライ「シェイミは戦いには反対だが、勝てる訳がないから隠れていると…クレセリアは勝てそうな方に味方すると言っていた

…これからラティオス、ラティアスの所に行くつもりだ」

ギラティナ「すまん…皆の説得を任せて…」

ダークライ「大丈夫だ、問題ない。オレの力なら素早く移動出来るしな。じゃあ、行ってくる」

そしてダークライは影の中に沈み、消えた。

ミュウツー「私もカントーの奴等を説得したほうが…」

ギラティナ「やめておけ、三鳥はルギアを尊敬している…彼奴等はルギア次第だ。それにオレはディアルガ達には会うことすらできそうにない…アルセウスの裏切り者だしな」

ミュウツー「…そうだな」

ミュウツーはそう言つと、そこらじゅうに浮いているシャボン玉の様なものを見渡す。

ミュウツー「私は前回の戦いには参加していなかった…もう戦いはうんざりだったからな」

ミュウツーは遠くの方に浮いているシャボンを見る。その中には無人島が写っていた。今だにかたずけられていないガレキがちらばっている。

ミュウツー「しかしもう私がしたような悲劇は繰り返したくない…だからこの戦いを止める」

ギラティナ「オレも同じだ。前の戦いでオレのした事の償いとして、皆の暴拳を止める」

ミュウツー「そのためにも、今はダークライを信じよう」

ギラティナ「ああ、それしかない。十分な数が戦いに反対してくれば…皆もやめてくれるかもしれないから…」

そして同じ頃、ある村で運命がうつごきだした…

## プロローグ（後書き）

ふーやつと終わった〜途中で意味分かんなくなって3回ほどきえちやったよ、本文。

さて、今日から書かせていただく、ジンダイです。感想を書いてもらえれば嬉しいです。どうかよろしくお願いします。



## 6月3日 ポケモンが貰える日(前書き)

第1話 よう~~~~~やく始動!!!な~~~~長かった..  
..軽く3、4回ほどきえたよ.....本文.....

ナオヤ「惨めだな、作者」

あ、脇役のナオヤ君

ナオヤ「準主人公と言ってほしいね」

一緒じゃん。

ナオヤ「ハア、脇役と準主人公の違いも分かんないような馬鹿な作者だと、俺達が苦労するぜ」

(カチン) それ、本気なのかな？ナオヤ君？

ナオヤ「本気に決まってるじゃないか」

フーン (ニヤリ) じゃ、本編スタート!!!!

ナオヤ「何言ってたんだ？作者は？」

## 6月3日 ポケモンが貰える日

ホウエン地方、キナギタウンとカイナシティの間にある小さな島。  
朝、この島のひとつの民間で少年が眠っていた。

少年「ZZZ…」

お母さん「コウタ〜朝よ〜起きなさい〜」

少年の母親がリビングから呼び掛けている。

コウタ「ん…ん〜もう朝か…眠む」

少年…コウタは眠そうに目をこする。

お母さん「今日は6月の3日でしょ〜いいの〜」

コウタ「なぬ!! そうだったのか!!? 僕としたことが…今いくぞ…!!」

コウタは跳ね起き、素早く着替えて走る。

この村では、10歳以上の人は今日…6月3日に最初のポケモンをもらい、旅立つことができるのだ。

コウタ「リビングに到着!!」

リビングには、すでにパンと牛乳、味噌汁の朝食が用意されていた。

お母さん「早いわね〜いつもとは大치가…」

コウタ「いただきますごちそうさまいってきますダッガチャドガ

ツバタツ」

コウタの朝食は一瞬で綺麗に食べ尽くされ、肝心のコウタは玄関で誰かと激突し、伸びていた。

お母さん「コウタ、気をつけて行つてらっしゃい」

お母さんは玄関であつた事に気づいてないようだ。

コウタ「痛つて…おい！ナオヤ！！危ねえだろが！！気づけろよ！！」

ナオヤ「んなこと言われてもな、お前が急に飛び出してきたからだろが！！！！」

この少年はナオヤ。コウタの幼馴染みであり、親友だ。

???「全く…二人とも慌てすぎよ」

ナオヤ「メイみたいな乱暴凶悪女には言われたくnグボホッ」

ナオヤは後ろにいた少女に殴られ、うずくまった。

メイ「だゝれが乱暴凶悪女つて？」

この少女の名前はメイ。二人の唯一の女友達だ。というより、この村では10歳前後の少女は1人しかいない。

メイ「それで、どうでもいいけど二人とも服が乱れ過ぎよ。儀式にはちゃんと正装でいかなきゃ」

そう言つて、メイは綺麗に着こなした服をみせびらかす。

ナオヤ「ちつ、年下の癖に」

メイ「なんか言った？（怒）」

ナオヤ「いえ何も（汗）」

ナオヤは昨年の6月後半、メイは一ヶ月前に10歳になったので、コウタとナオヤの方が年上なのだ。

コウタ（メイって将来、ずっと黙ってたら絶対モテるよな…）

メイの事を密かに可愛いと思っているコウタは、ナオヤがボロボロにされているのを見ながらそうおもった。

メイ「じゃっ、あそこのぼろ雑巾はほっというて祠に急ぎましょっか」

もはや、ぼろ雑巾扱いされているナオヤ。

ナオヤ「…………グ…ガハ…」

もはや立てないほどまでボロボロになっているナオヤだが、どうせいつもの事なのでコウタはほうっておいた。

メイ「ねえ、コウタ？最初のポケモン誰にするの？私はリリーラとホエルコがいいな」

ナオヤ「俺はアノプスとジーランスがいいZE」

コウタ（いつもながら復活早）

メイ「黙れ、社会のテスト＊点が。（点数はある人物の要請により削除）」

ナオヤ「ガハッ…ひ、人の古傷をつつくのはやめようか…そのテ

ストは頑張つて追試でとりかえしたし……」

しかし、ナオヤが弁解（言い訳）をしている間に二人は先に行つてしまった。

ナオヤ「おい！まつてく「グボハツ」

二人は、ナオヤが何も無いところで転んだ事に気づくはずもなかった。

6月3日 ポケモンが貰える日（後書き）

ナオヤ「オイ！作者！！」

んゝ、何ゝ

ナオヤ「何だよ！あの俺のあつk……」

ネタキヤラ

ナオヤ「返答早すぎだろ！！？」

じゃあ、また今度。 ダツ！！

ナオヤ「あつ、逃げられた……」

さあ、いざ祠へ！！（前書き）

ただ今、隣で伝書鳩リネロサースデイが、ぼやきながらGENT  
Sの続きを書いております。

コウヤ「悲愴さんって名前のとおり悲しい人だね…」

作者に似たんでしょ、悲愴もナオヤもモデル同じだし。

コウタ「え！？そうなの！！？」

うん。あの社会のテストも実話だし。でも次のテストでなんと7  
1点上がったという奇跡を起こした人でもある。

ナオヤ「要するに、俺はすごいんだな」

いや、71点上がったということは、その前は29点以下だった  
ということだよ。（しかも上がっても普通レベルだったし）

ナオヤ、悲愴、伝書鳩リネロサースデイ「うるせえ！！！」

ということで一行だけ、コラボしました。では、本編スタート！  
！！

さあ、いざ祠へ！！

3人は最初のポケモンを貰うため、祠に急いでいた。

メイ「そういえば、コウタはポケモン誰にするの？」

コウタ「うーん、気のあうポケモンなら誰でもいいかな…」

コウヤ「曖昧だな。スクールのアンケートで「最初のポケモンは何がいいですか」っていうのがあったが、何て書いたんだ？」

コウタ「気のあいそうなポケモンって書いた」

メイ「コウタったら…」

一応、この村にもトレーナーズスクールがある。生徒は全部で10人ほどしか居ないが。

コウタ「あつ、見えてきた」

コウタが指差した所は海岸線で、そこには一人の男が立っていた。

ナオヤ「あ、兄貴！！？」

メイ「コウヤさん！？」

コウタ「コウヤさんが祠まで連れて行ってくれるんですか？」

この男はコウヤ。ナオヤの兄である。けっこうチャラくて軽い性格だ

コウヤ「おうよ！いけ！！ジーランス！！！」

コウヤのモンスターボールから赤い光が飛び出し、中からポケモンが出てきた。



ジーランス「じらっ」

ユウヤ「さ、みんなこれに掴まってくれ」

祠は海底の方にあるためポケモンの技、ダイビングを使っていくのだ。

そして4人はジーランスに掴まった。

ユウヤ「行くぜ！ジーランス、ダイビング！！」

ジーランス「じらっ！」

ジーランスの周りに空気の膜ができ、3人を包みこんだ。

バシャン

4人はジーランスと共に、海底へとむかった。

ナオヤ「ガボボボボボボボボボボ！！……」

コウヤ（あれ？そういえばジーランスって4人も連れてダイビングできたっけ…）

祠の入り口

ナオヤ「げほっ、げほっ、げほげほげほっ」

ユウヤ「悪いい、ジールランスは3人乗りだったわ」

むせているナオヤに、ユウヤは全く全然ちつとも反省していない様子で謝る。

メイ「さっ、行くわよ」

コウタ「うん」

ナオヤ「俺についてはノーコメントですか…」

そして4人は祠の奥に向かってあるきだした。

さあ、いざ祠へ!! (後書き)

短くてすみません。時間ないんで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9388y/>

---

ポケットモンスター 終らぬ戦い 変わりゆく世界

2011年11月29日17時54分発行